

2万 km 先の友人たち
—— 日本-チリ学術フォーラム参加記にかえて

田坂建太

私は出不精な人間で、遠出をすると決まるとなると決まってその大変な側面ばかりが目につき、何かと億劫に感じてしまう。なので、10月のおわりに和田先生から、学術フォーラム参加のためのチリ行きの手配が用意できたと連絡をいただいた時、私のような一学生のために多方面と交渉してくださった先生のご厚意に深く感謝しつつ、心の隅ではこれは大変な遠出になりそうだと不安な思いも感じていた。とは言え、地球の裏側でフォーラムに参加できる機会など、滅多にあるものではない。出発はちょうど1か月後とのことだった。翌日には旅行代理店の窓口駆け込み、航空券の見積もりを依頼し、それからパスポートのための写真を撮り、と奔走しているうちに、自分は本当にチリに行くんだと実感がわいてきた。10時間越えのフライト2つを乗り継ぐ渡航予定には気後れしたが、一度踏ん切りがつけば何とかなるもので、11月さいごの土曜日には朝のサンティアゴの街に放り出されていた。



フォーラム会場はサンティアゴから南に1000km、プエルト・モンという町にあったので、サンティアゴにはわずかな間しか滞在できなかった。それでも、かつて駒場で教鞭をとっていたサンティアゴ在住の先生やそのご家族、以前東大に留学していて知り合ったチリ人の友人やそのまた友人など、こうした機会が無ければ会えなかったであろう人たちと面会できた。11月末のチリはこれから夏がやって来るといふ時期だったが、サンティアゴの昼は30度越え、その友人たちは翌日プールに行くらしかった。ところが、サンティアゴの空港でフォーラム参加の先生方と合流し、プエルト・モンまで飛んで行くと、こちらの夕方は羽織りもが必要な涼しさで、夜には10度を下回る肌寒さだった。チリは南北に細長いとは知っていたが、まさしくその長さを肌身で知った。もっとも、国土の端から端までは4000kmを優に超すらしく、実際にはその4分の1も移動していなかったようだが。

私たちの参加した日本-チリ学術フォーラムは、いわゆる理系分野からの参加者が大半を占めていて、われわれ文系グループは比較的小規模な一団であった。そのおかげもあってか、チリ側の方々ともすぐに打ち解け合い、発表の合間に色々と意見を交換できたことはもちろん、夜には美味しい店に連れて行ってもらったり、休日には皆で買い物に繰り出したりと、スケジュール外の時間にも交流を深めた。現地の若手研究者、とりわけ自分と同年代の学生と知り合えたことは大変な刺激になった。エミリアはチリ大学の学生で、自ら街に出て社会運動に携わりながら、そうした運動についての研究を進めている。「己に如かざる者を友とする無かれ」とは論語の有名な一節だが、日本・チリ双方の多くの研究者の方々との知り合い、信念をもって課題に向き合う姿を見せてもらったことは、1週間の滞在から得られた何よりの収穫であった。



われわれのグループではエミリアと私の2人だけが学生の発表者で、ともに2日目の昼の枠を与えられていた。初日に大半の先生方が発表され、会場のロス・ラゴス大学のカフェテリアで皆が談笑する中、私たちはパソコンを開いて準備に追われていたのを思い出す。私にとっては初めての海外での研究発表の機会だったが、これほど温かい空気の中で経験できたのは全くの幸運だったと思う。発表の主題は、私がこれまで研究してきたカタルーニャ語作家、マヌエル・デ・ペドロロの作品分析であった。緊張もあってかなり辿々しい英語になってしまい、準備した内容をすべて伝えきれなかったことには後悔が残った。それでも、発表後には作家の詳細や作品の背景についての質問を受け、会場からホテルへ戻るバスの中では、報告の構成についてのアドバイスもいただいた。バスの窓ガラス越しに、赤毛の牛が放牧されたチリの草原を眺めながら、今後の研究の指針についてあれやこれやと考えていた。

地球半周の旅路は長い。私たちが泊まっていたのはヤンキウエ湖のほとり、プエルト・バラスという町だったが、金曜日の昼にそこを立ち、羽田に着いたのは日曜日の夜だった。風光明媚なヤンキウエ湖の奥にはオソルノ山という有名な火山があり、富士そっくりの姿をし

ている。あっという間の1週を終えて自宅に戻ってからも、ふと散歩の途中に「日本のオソルノ」を眺めては現地での経験を思い出し、2万 km 先の友人たちに後れを取るまいと、研究を進める力ももらっている。改めて、私のチリ渡航のために尽力くださった皆さまに御礼申し上げたい。ところで、この日本-チリ学術フォーラムは2年に1度、両国が交代で開催することになっているようだ。先に引いた論語・学而第一の冒頭には「朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや」の一節がある。今度はこちらに遠方の友を迎え、互いが学び、習い続けてきた成果について、また語り合える日を楽しみにしている。

